



指導教授になったのではないと思われる。赤松先生は1960年に一橋大学を定年退官し、同年、明治大学教授に就任された。私が明治大学大学院に入学したのが、赤松先生が明治大学に着任して間もない1962年であったので、授業はもっぱら雁行形態理論の展開を論述され、私たちはよく聴かされたものである。

明治大学大学院の入学が許された後、これからの研究テーマについて相談したいことで、赤松先生の研究室を訪れた。タバコの煙が立ち込める研究室の中に、先生からどういう研究をしたいのか、逆に聞かれ、私は「戦時体制下の統制経済」、もしくは「後進国の経済開発」という二つのテーマを告げると、先生は「これからは第二次世界大戦のような大きな戦争はあり得ないから、むしろもう一つのテーマの方がいいだろう」と言われ、即座に後ろの本棚から分厚い原書、Gerald M. Meier & Robert E. Baldwin 共著の「Economic Development - Theory, History, Policy, 1957年」を取り出し、「これを読み終わった後、演習の時間で報告せよ」と言われた。原書を読むのは慣れているが、問題は専門用語を日本語ではどう使われているかはよく知らない。例えば、wage を中国語では「工資」、「工錢」として訳されているが、日本語訳では「賃金」として表現されているように、専門用語を日本語に変えるのに一苦労であった。その当時は経済学用語の英語辞書が無く、普通の英語辞典を引きながら確認し、かなりの時間を費やし苦労の連続であった。

博士課程に入ると当初予定していた松尾弘先生の指導を受けることになるが、松尾先生はマラヤ（現在マレーシア連邦）・シンガポールの経済発展問題の第一人者で、研究業績も多い。松尾先生の薫陶を受け、次第に東南アジア経済問題に興味を持ち、博士課程満期退学後、先生の推薦でアジア経済研究所に一年間研究専門員として、もっぱら援助の経済効果の研究に専念

していた。

1968年に福岡大学経済学部産業経済学科を増設することから、カリキュラムの再編によって発展途上国経済論と東南アジア経済論という科目が増え、両科目を担当することで、私が経済学部講師として採用された。

発展途上国経済問題が国際的に重要視されるようになったのが、1959年にイギリスのロイド銀行頭取のオリバー・フランクス卿が講演の中で、初めて南北問題を提起し、南側の発展途上国と北側の先進国との経済格差を縮めるには、先進国の援助と協力が必要であると主張する。これを受けて1961年の国連総会で故ケネディ・アメリカ大統領が演説を行い、先進国の協力を呼びかけた。ここで初めて発展途上国問題が国際舞台に登場するが、これに合わせるかのようには発展途上国の開発理論が様々な角度から提起され、論述されるようになった。研究テーマを尋ねた時に、後進国の経済開発の重要性を察知し、私に的確に指示してくれた赤松先生の学問的な偉大さに敬服するばかりである。

中国経済について本格的に研究を始めたのが、1980年代に入ってからである。その契機になったのが、所謂「一人っ子政策」が厳しく実施されることになって、それが中国の経済・社会に与える衝撃の大きさを研究テーマにして文部省（現在の文部科学省）への科研費申請であった。研究費が認められるには、中国研究に関する業績が必要であり、そこで主に人口問題に関連する文献の邦訳を重点的に進め、ついに研究費（一般研究C57530023）が認められた。これを機に中国経済に関心を持つようになった私は、研究範囲を東南アジア経済から東アジア経済に広め、発展途上国と自称する中国の経済はこれからどれだけ発展するかに注目し続けるつもりである。今後は教職から身を引くが、中国には「活到老、学到老」という格言があり、その通りに私は学習と研究を間違いなくさらに続けるであろう。



みられるはずの変化が打消されてしまう結果、単純な1相の反応となるのである。そこで私は、血中インスリンの消失曲線を算出した。それを分泌パターンに加えて、遂に2相性分泌を表現することが出来る様になった (Endocrinol Japon., 1978)。この様な数式を発展させ、2 - コンパートメントモデルを組立て、インスリン分泌様式に当てはめ、膵からの分泌パターンを末梢での血中インスリン測定より、評価することができるようになったのである (Third Int. Nat. Symp. on Treatment of Diabetes, 1988)。膵インスリン分泌機能の低下は、糖尿病患者共通の現象であるが、血糖コントロールにより分泌機能は一部快復する。それは第1相か第2相か、このモデルを用いて検討することが出来る様になったのである。

先に求めたインスリン消失曲線は、基礎分泌と同一と見做される。消失曲線の面積を算出すると、24時間に渡り膵より分泌される基礎分泌量が算出出来た (Diabetologia, 1978)。この数値は、後にインスリン持続注入治療をする場合の注入量として応用することとなり、大変有益であった。24時間のインスリン分泌量は、後にEatonらの論文 (JCEM., 1983) に引用された。何よりうれしい事であった。Eatonらのこの論文を参考に、2 - コンパートメントモデル数式を完成することが出来たことは、最も印象に残る仕事であった (糖尿病、1990)。

10年前より健康管理センターを兼務する様になり、冒頭に述べた様に、肥満した大学生の増大に心を痛めている。毎年200名以上の肥満学生 (標準体重 + 20%) が入学して来ている。これは10年前に比べると、2倍以上の増加である。ウエストを測定してみると、60%が中心性肥満 (内臓肥満; 男85cm以上、女90cm以上) を呈する。男性は女性の4倍である。肥満学生には、高血圧は25%、高血糖は16%にみられた。

中心性肥満者に限ってみると、高血糖は26%

と高率に認められた。一方、非中心性肥満 (ウエスト; 男85cm以下、女90cm以下) では高血糖は居なかった。若者には、内臓脂肪を取る運動を課することが、糖尿病の予防となるのである。

退任を前にして、健康管理センターの仕事は今後更に重要となると実感しているのである。

